多目的保安林総合整備事業に伴う

二ツ山城跡竪堀跡確認調査概報

１９８９年１２月

瑞穂町教育委員会

例言

1，　本書は、平成元年度、瑞穂町教育委員会が瑞穂町開発課の委託を受けて実施した多目的保安林総合整備事業に伴う二ツ山城跡竪堀の確認調査の概報である。

2，　調査は、平成元年１１月２６日から１２月６日にかけて実施した。

3，　調査組織

調査主体　　沢田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）
事務局　　井上　薫（瑞穂町教育委員会教育次長）
調査員　　吉川　正（島根県文化財保護指導員）

4，　調査に当たっては土地所有者　日高享三氏・瑞穂町開発課課長補佐　岡田恒喜氏の協力を得た。

5，　本書の作成は　吉川　正が担当した。

第１図　二ツ山城跡位置図

Ⅰ，周囲の環境と調査に至る経緯

広島県境に源を発する出羽川は、瑞穂町のほぼ中央を東流しているが、その流域には狭長な沖積平野や河岸段丘が発達し、いわゆる出羽盆地を形成しており、平地の少ない石見山間部の中では比較的恵まれた水田地帯となっている。

瑞穂町地内では、現在までに約500ケ所の遺跡の分布が確認されており、県内でも遺跡の分布密度の高い地域として知られている。この内の半数は鈩跡などの製鉄関係の遺跡であり町内各地に分布している。

集落跡・散布地・古墳・窯跡などの遺跡は、盆地の比高10～50㎜の段丘上や背後の低丘陵上に位置するものが多く、時期的には旧石器時代から歴史時代に至るものが知られている。

今回調査の対象となった二ツ山城跡は、この出羽盆地の北側に聳える比高230㎜の独立した尾根上に築かれた大規模な中世山城である。この二ツ山城跡に立つと、出羽盆地のほぼ全域を一望でき、また石見町地域との交通の要衝にあたる絶好の位置を占めている。

この二ツ山城跡は、県内でも有数の大規模な山城であり、比較的往時の姿を良く残していること、町内各地から仰ぎ見ることのできる恵まれた場所に位置するその堂々たる山容などから長い間町民に親しまれてきた町のシンボルでもある。

この二ツ山城跡については、田所公民館の活動として地区民の奉仕による草刈りがここ20年程続けられたおり、また瑞穂町文化財愛護協会による説明版・案内版の設置が行われている経緯がある。このような活動の中から、二ツ山城跡について町による買い取り・史跡公園として整備してもらいたいとの強い要望が起こってきたのである。

このような町民の要望を受け、1987年3月（昭和61年度）二ツ山城跡の主郭部6.3haについて町が買い取りを行い、今年度（平成元年度）多目的保安林総合整備事業の指定を受け、整備が行われることとなったものである。

今回の事業では、遊歩道の整備、雑木の伐採、桜や紅葉・つつじなどの花木の植栽などが行われる予定であるが、遊歩道の整備に伴い今回調査した場所において竪堀部分に橋が懸けられる予定であり、

一部現状が変更されることとなっているため、竪堀の規模確認のための調査を実施したものである。

Ⅱ，調査の概要

今回の調査の対象となったのは、本丸（東の丸）の南側に派生する尾根上に所在する南出丸と呼ばれる郭の下方の堀切り（空掘）から、タタラ谷の谷底までの山腹斜面を掘り込んだ竪堀の一部分である。ちょうどこの場所は、二ツ山の麓の永明寺地区から二ツ山の頂上に通じる通称殿様道と呼ばれる通路が、前述した竪堀を横切る場所にあたる。（第２図参照）

現在、殿様道はこの場所で大きく山側に回り込んで続いているが、これは後世に山肌を削り竪堀を埋めて道を通したもので、本来はこの場所に長さ約10㎜の橋が掛かっていたものと考えられる。

調査は、今回の橋の予定地を中心に7㎜×3,5㎜の調査区を任意に設定して行った。

調査の結果、現在の地表下3㎜のところで竪堀の底を確認した。底部の巾は1,45㎜であり、埋没土は50㎝大の石を含むガラガラの礫がほとんどである。（第３図）

竪堀は岩盤を大きく掘り込んで作られている。掘り込みの角度は北側で60度・南側で75度であり、かなりな急傾斜となっている。また谷に向かっての傾斜は45度である。

現在、竪堀の北側の斜面はこの掘り込みの角度に近い傾斜となっていることから、本来の地形をかなり良く残しているものと考えられるが、南側の斜面の角度は掘り込みの角度よりもかなり緩やかになっている。しかしこの竪堀を掘りあげた土砂が下方の谷部分にあまり落とされていないようであることから、この南側の部分には本来はかなりな盛り土がなされていたことが考えられる。

前述したとうりこの部分は後世の道の補修によりかなり元の地形が変えられていること、今回の調査範囲が狭いことなどから、本来の竪堀の規模を推定することは困難であるが、今回の調査断面図からみて少なくとも巾8㎜・深さ5㎜はあったものと考えられ、当初の想定以上に大規模なものであったことが明らかとなったのである。

遺物としては、地表下約1㎜のところで鉄分の錆が認められたが、

取り上げることができなかった。

Ⅲ，二ツ山城跡について

二ツ山城は、貞応2年（1223）富永氏（後に出羽氏と改称）によって築かれたと伝えられる。これは益田七尾城に次いで石見国では2番目に古い城である。以後、天正19年（1591）出雲頓原に移封されるまでの約350年の間出羽氏の居城であった。（一時期は君谷・宇山に居した）

今回の多目的保安林総合整備事業の対象となる町有地部分については、1987年度瑞穂町教育委員会により測量調査が行われており、その縄張りがかなり明らかにされているが、二ツ山城全体の縄張りについては未だはっきりとしていないことも多い。ここでは、現在明らかとなっている二ツ山城の縄張りについてその概要を紹介することとする。

下田所地区から二ツ山城に至る谷は現在福城谷と呼ばれているが、ここには瑞穂工業背後の丘陵上に福城と呼ばれるかなりの規模をもつ砦跡があるほか、谷を挟んだ反対側の丘陵上（玉屋商店裏から桑野直夫氏宅付近）にも削平地・堀切の痕跡が認められ、福城谷からの敵の侵入を防いでいたものと考えられる。また、出羽地区から二ツ山城に至る通路となる三沢谷の入り口には瑞穂町役場の裏山に削平地・堀切らしきものがあり、ここに小規模な砦があったものと考えられる。つまり二ツ山城の前面の低丘陵が第一線の防衛線であったものと考えることができる。

二ツ山城から西、石見町方面に派生する尾根上（日高勲氏宅裏）には、広石城と呼んでいるかなり広い削平地をもつ砦跡があり、石見町方面からの敵の侵入に備えていたものと考えられる。

馬の原地区は二ツ山城関係の馬を飼っていたところと伝えられ、ここには二ツ山城の重臣の屋敷跡と伝えられる四ツ土居（日高昇氏宅）があり、その背後の尾根上に鳥打城と呼ばれる小規模な砦跡がある。これは瑞穂町高原地区から荷メ峠を経て侵入してくる敵・石見町方面から山をこえ緩木を経て侵入してくる敵に備えたものと考えられる。

二ツ山の麓にある永明寺地区は、正平16年（1361）高橋氏の侵攻

により炎上したと伝えられる永明寺に由来するが、小丸・門前・弓場など二ツ山城にかかわると考えられる地名が数多く残されており、この一帯に城主や家臣団の屋敷があったものと考えられている。

この永明寺地区から二ツ山城の主郭部に通じる道は殿様道と呼ばれているが、この入り口部の尾根上（日高享三氏宅裏）は南出城と呼ばれ、数段の帯曲輪や堀切・竪堀がみとめられる。

殿様道を上ると今回調査した竪堀部分を経て二ツ山城中央部の神明空堀から馬場の前面をほぼ水平に走る細長い通路に至る。ここから東に上ると本丸（東の丸）である。

本丸は約65ｍ×25ｍの広さがあり、一部に土塁が残っている。本丸の中央部には約25ｍ×15ｍの広さで一段高い場所があり、ここに主要な建物があったことが考えられる。

本丸の東には一段低い馬屋の段と呼ばれる曲輪があり、これに続く東側の尾根は４本の大規模な堀切（空堀）と竪堀により切断されている。

本丸の南には永明寺地区に向かって尾根が延びているが、ここには太鼓の段・南出丸などの曲輪が造られ、その下方は今回調査した竪堀に続く２本の堀切（空堀）により切断されている。さらにこの尾根を下ると前述した南出城に至るが、その間には何ケ所かの帯曲輪があるようである。

本丸の北側には雪隠の段と呼ばれる小さな曲輪があり、これに続く尾根も大規模な堀切により切断されている。この堀切の北側に続く尾根上にも何段かの削平が認められるが詳細は不明である。

本丸の西、二ツ山の中央部には馬場・舞殿の段・神明丸・神明空堀などの曲輪群が配置されており、ここから西に一段上ると広い削平地に至る。この削平地の中央には約８ｍ×１５ｍの一段高い場所があり、お蔵の段と呼ばれている。

ここからさらに上ると二ツ山城の最高所（530.8m）にあたる西の丸に至る。西の丸の広さは約20ｍ×30ｍである。

西の丸の南には泉水の段と呼ばれる曲輪があり、この西２０ｍのところに殿様池と呼ばれている小さな池がある。ここには現在でも水を湛えているが、これが二ツ山城主郭部での唯一の水源である。

西の丸の西には天神丸と呼ばれる曲輪があり、これに続く尾根は

大規模な４本の堀切（空堀）とこれに続く２本の竪堀により切断されている。

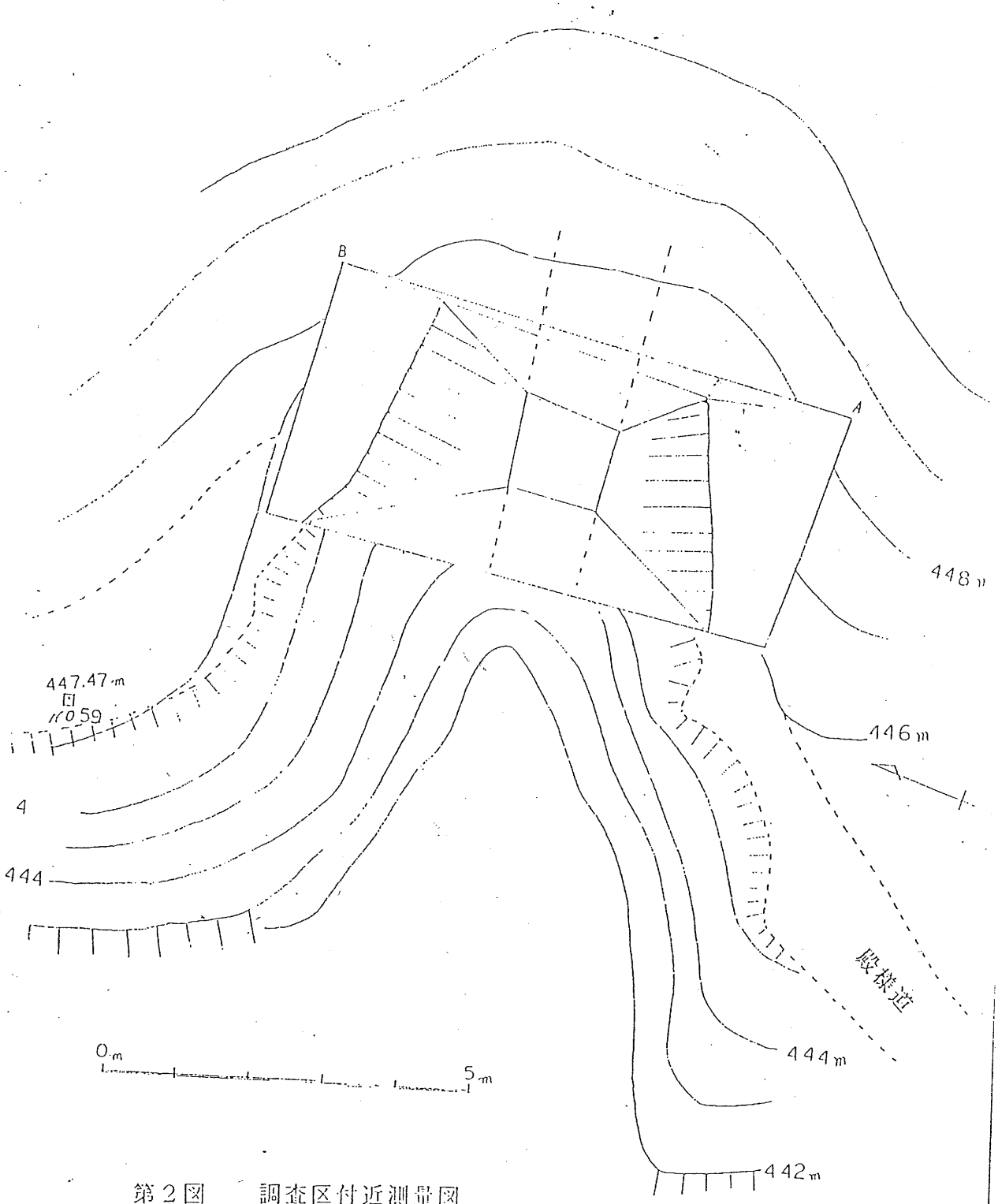
西の丸北側の広石城に続く尾根上にもなんらかの施設が設けられているものと思われるが詳細は不明である。

二ツ山城は、県内有数の規模を持つ山城であり、当地方の中世史を探る上で極めて重要な山城である。しかし、その全体的な縄張りについては未だ不明な点も多い。今後の調査・研究によりさらに正確な城郭配置を明らかにする必要があると考えている。

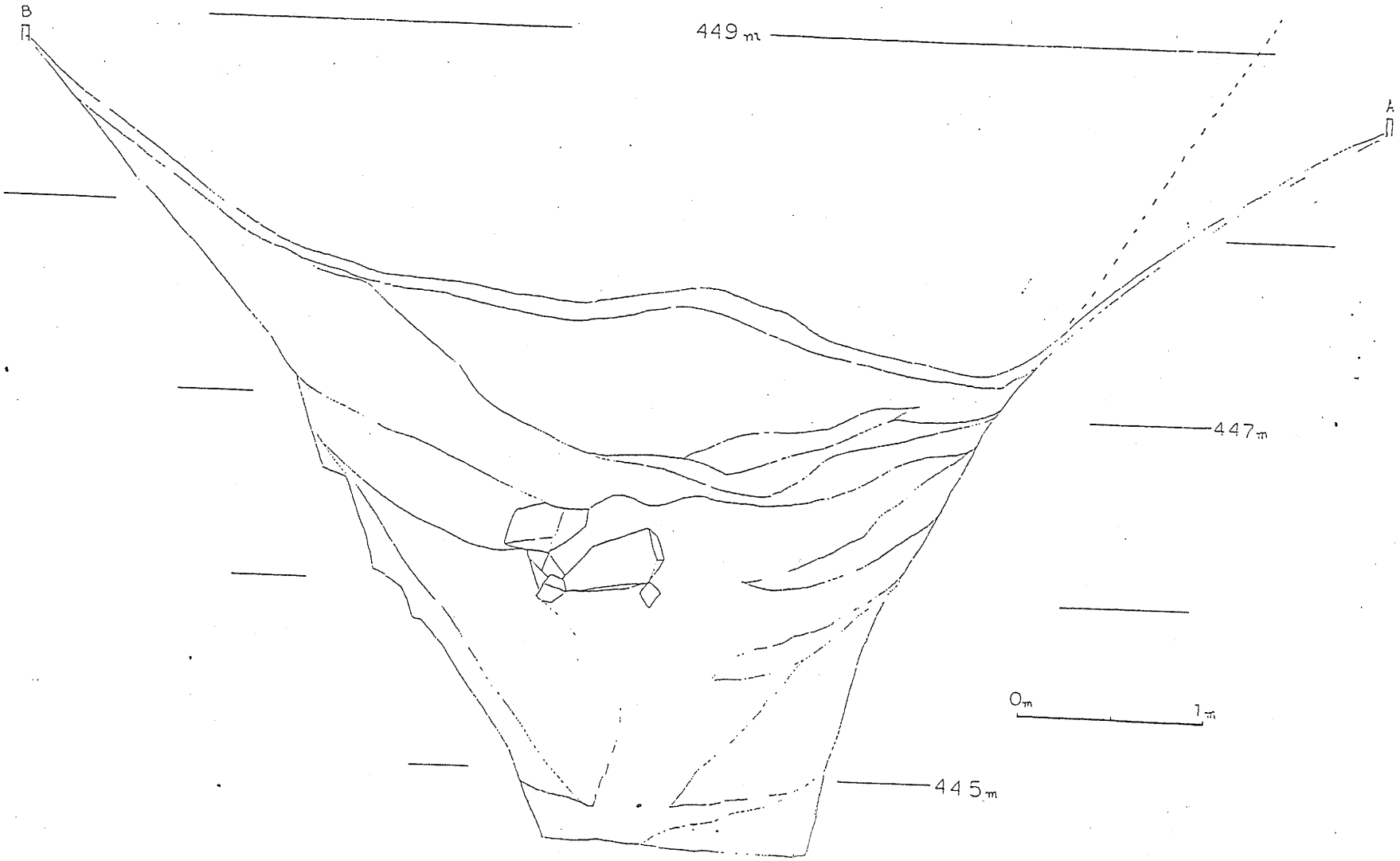
Ⅳ，まとめ

今回調査した竪堀は、当初想定した以上に規模の大きなものであり、城が機能していた当時は長さ８～１０ｍ程度の橋が架けられていたものと思われるが、その後の道の補修によりかなり地形が変えられており、今回橋の架けられる予定の場所では約４，５ｍの巾となっている。この竪堀を保護するためには少なくとも５ｍ以上の橋が架けられることが必要と思われる。しかし今回計画されている橋の長さは４ｍであり、橋台の一部が竪堀の内側に出ることとなりそうである。すでに工事契約も終わり、一部事業も進められていることから設計の変更は困難なようであるが、関係機関での協議の必要があると考える。

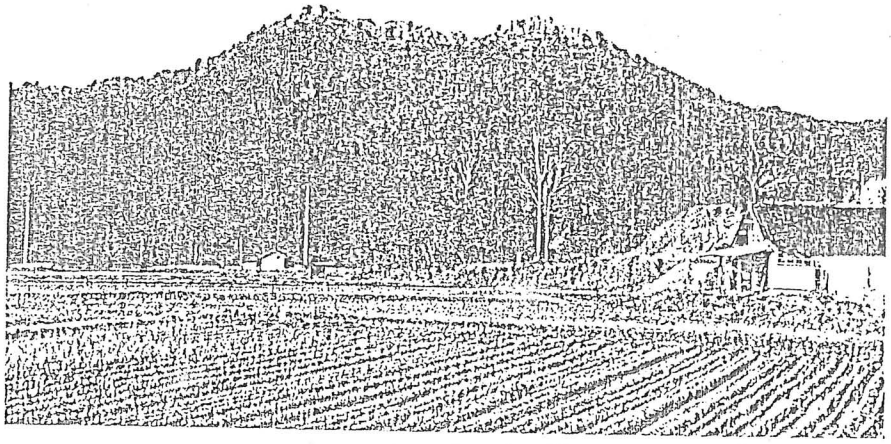
多目的保安林総合整備事業(二ツ山)



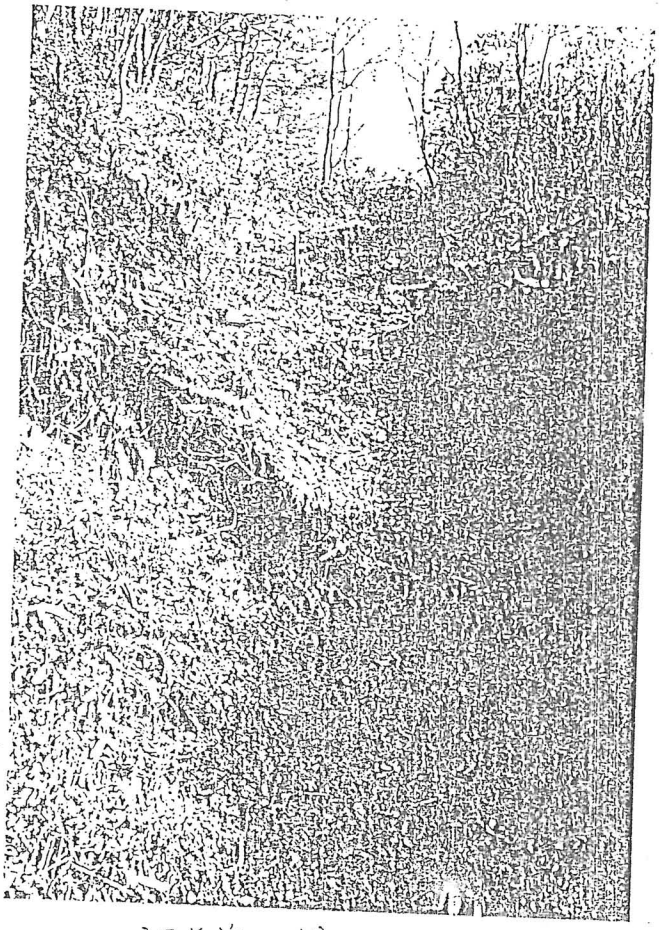
第２図　　調査区付近測量図



第３図　　竪堀断面土層図

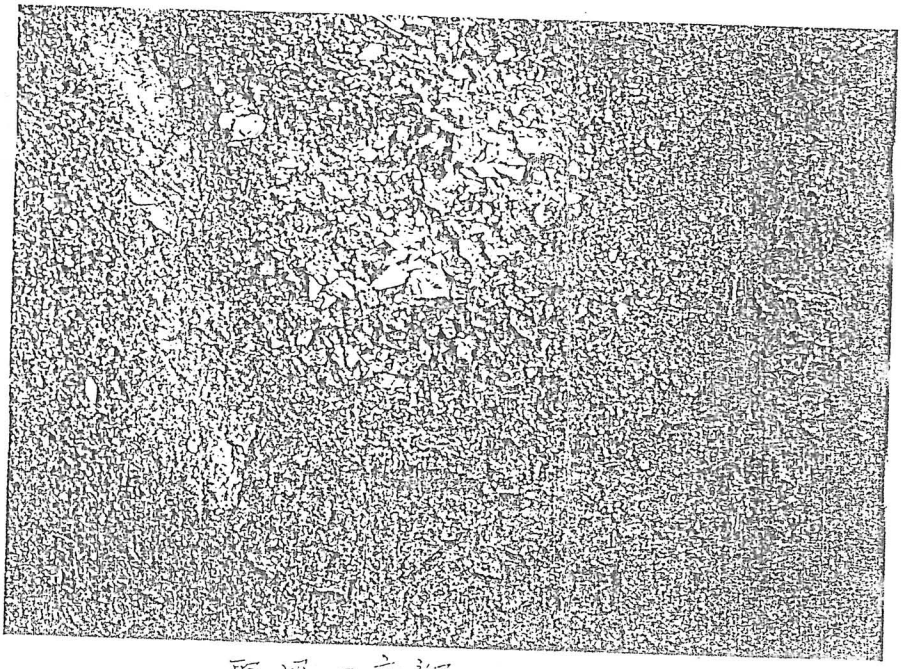


二ツ山城跡遠景

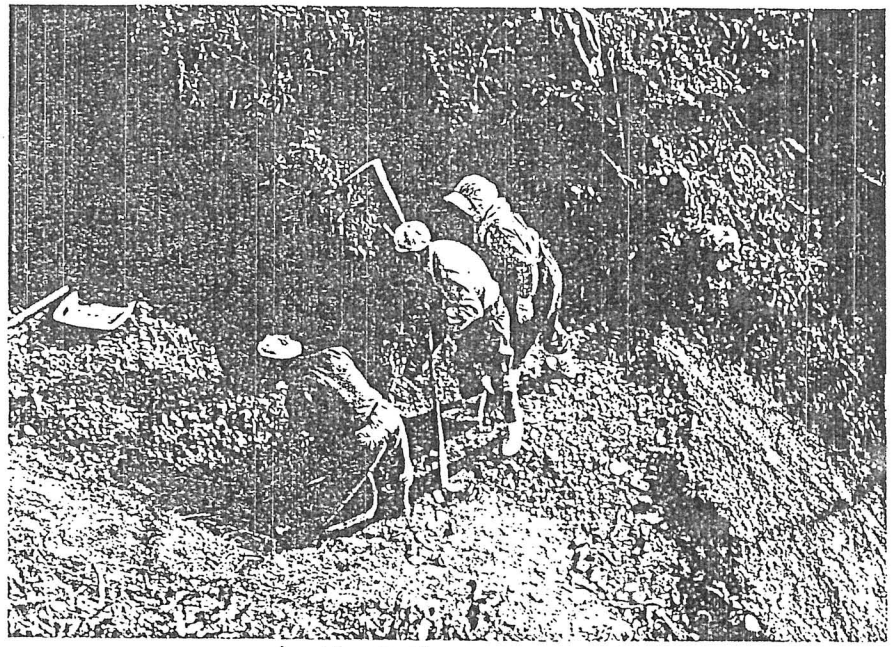


調査前の状況

調査後 土砂斜面



盛土の変部



作業風景